上方落語に見られる
尊敬語補助動詞の語用論的分析

角　岡　賢　一

▶キーワード

上方落語
待遇表現
尊敬語補助動詞
言い換え、付け足し

▼要　旨

In this paper, a pragmatic analysis of honorific locutions expressing the speaker's honorific attitude will be shown citing the examples from the Kamigata Rakugo stories. Such honorific locutions cover the syntactic categories of pronouns, nouns, main verbs and auxiliary verbs. The focus in this paper will be put on auxiliary verbs. The most characteristic finding here is that there are various types of auxiliary verbs, and that those varieties are actually interchangeable. The differences of auxiliary verbs can be partly ascribed to the geographical ones within the Kinki disctrict, and further we can point out the greater differences between Western and Eastern Japan. That is to say, the varieties and usages are more frequent in Western Japan.

第一節　はじめに

この小論では、日本語待遇表現という見地から上方落語に見られる尊敬語の補助動詞について論じる。

近畿地方一円における尊敬語補助動詞体系について、『関西弁事典』は地域別に次のような七類型を立てている（「敬語・敬いの表現」）。

(1) 〈ル・ラル系〉 滋賀県湖東・湖南、京上北山、摂津と河内の一部、泉南
〈セラル・セラレル系〉 三重・滋賀・若狭と近畿東部の一部
〈ナサル系〉 近畿全般で優勢
〈アスバセ系〉 京 (名古屋近郊、富山)
〈アル系〉 大阪
〈テ＋指定辞系〉 播州
〈テクレル系〉 伊賀

地域区分は、摂津や河内、播磨など旧国名によるものや滋賀県内の区分で湖東や湖南など、細かいのが特長である。この七区分のうち、最初の五つは楳垣実氏『近畿方言の総合的研究』によるという。残り二つは、この項筆者である西尾純二氏が追加したものと思われる。ここでの地理的範囲は、「畿内五箇国」と括られる山城・大和・摂津・河内・和泉をも遙かに超えている。仮にこの範囲を現行の大阪府と限定してみても、「摂河泉」と総称される三箇国に及ぶ。上掲の分類では〈ナサル系〉の他に〈ル・ラル系〉も含まれることになる。本稿での分析対象は船場言葉にほぼ限定することとする。船場言葉以外を分析対象に含めた場合、分析が複雑すぎて収拾が付かなくなる恐れがあるからである。船場のすぐ南、長堀を隔てて隣接する島之内は、船場言葉と微妙に異なると指摘されるが、船場言葉と対比するために考察の対象として重要である。その反面で、「大阪方言」と括った場合には摂津と河内と和泉の区別がされないようになってしまう。却って「京阪方言」として船場言葉と京言葉の共通点を強調する方が実態に近いのではないかと思われる。

また金沢裕之氏『近代大阪語変遷の研究』では、「待遇表現」という章でテ敬語、ハル敬語、レル・ラレル敬語に分けて分析を進めている。本稿における分類では、尊敬語助動詞に相当する部類である。上掲の地域別類型では、テ敬語は播州、レル・ラレルは上掲の〈ル・ラル〉に相当するであろう。ハルは「なさる」から変化を経たものと同書でも考察している。同書は約百年前の上方落語音源による実例も豊富であり、以下でも引用することとする。

本稿で論じる尊敬語体系に近いのは、近畿地方全般で優勢とされる〈ナサル系〉である。「なさる」は、全般的に「なはる」と音声・音韻変化を遂げる。京阪方言においてはサ行が体系的にハ行に移行する傾向が観察される。「なさる」系は、『関西弁事典』では「ハル敬語」という術語で統一されている。「ハル敬語」の語用論的説明として、次のように述べられている(同書、163-164頁)。

(2) ハル敬語は、社会的に定まった上下関係だけではなく、話し手個人による対象となる人物への好き嫌いや評価の高低によって、使用の有無が決まるという側面がある。これは上方の複雑な人間関係や他者への評価のあり様を反映するもので、この地域の運用上の敬語の特質であると考えられる。

このように、尊敬語助動詞だけを取ってみても一筋縄ではいかない語用論的側面を示唆している。話し手個人の主観が大きく反映されるなど、一般化しにくい側面も懸念されるところである。本稿における分析は、(2)で言及されているような「社会的に定まった上下関係、上方特有

の複雑な人間関係」を客観的に体系化しようとする試みである。「上方特有」というのは、例えば通時的に丁稚制度が残っていた時代の商家における事情を加えてみると何層倍にも複雑になるであろうと想像される。そしてその体系は助動詞のみに留まらず、人称代名詞や終助詞など多岐に及ぶであろう。

第二節　尊敬語補助動詞の語彙項目

丁寧表現の補助動詞

ここでは尊敬語としての助動詞について検証する。扱う助動詞は、客観的に叙述をする事態について中立的ながら、丁寧語を形成する部類と、相手の動作に対して尊敬度を加える部類とに大別する必要がある。前者は「ございます、やす、だす、おます」と卑尊度に応じて細かく区分される。後者は、船場言葉としては「なはる」が主体である。

「ございます」

叙述の助動詞において、尊卑度の高い言い方―つまりは丁寧な物言い―は「ございます」であろう。これは時代がかった物言いである。『大阪ことば事典』253頁の説明を参照する。

(3)　大阪で最もていねいな言葉である。オマスが、今は大阪弁として一番よく知られているが、実はこれは中流以下の者の使用する言葉であって、船場などの商家では「オマス」は決して使わず、必ずゴザリマスであった。

否定形は「ござへん」で、同書の語釈に「船場の御寮人さんなどが用いた上品な言葉」とある。「ございます」から「ごわす」への音韻変化は下掲(4)に譲る。実例としては、『矢橋船』という噺で近江八景の一つである矢橋から大津までの船上で、旦那のお供をする久助が「へえ、これにございます。どうぞ」と酒の肴を供している（『米朝全集』第七巻）。丁寧度が最も高いのは、旧弊な響きを伴うからであろうか。忠義の番頭が、真夏に蜜柑を食べたいという無理難題に命がけで奔走する噺『千両蜜柑』で、苦労の末に見つけた蜜柑一粒の十袋から、若旦那が七つを食して残り三つを両親と番頭で食べとおくれ、との仰せ。「お心のこもりましたお言葉、ご両親に申し伝えますでございます」と番頭が礼を述べる。ここまでは番頭は忠義一辺倒であったが、急に変心して「この三袋は三百両、、、」と迷うて、これを懐に逐電してしまうというのがサゲである（同第四巻）。

丁稚がお奉行様お白洲の場で申告した場面であるが、噺『次の御用日』で常吉がお取り調べの場で次のように申し述べている（『米朝全集』第五巻）。「よそさんはみな、ほっとせんように、言うておやつが出ますのに、ご当家は出まへんねん。えぐうございます、、、」。十代前半と思われる丁稚の口から出た申告としては、奉公先の実情を暴露して些か重々しい。しかしながら、却って素朴な印象を与えて訴訟の信頼性を高める結果に繋がるやも知れない。

先代米團治師の速記『代書』には、当日代書屋に依頼に来た四人のうち、最後の一人が年の頃十二三の可愛らしい丁稚さんとなっている（米朝師編『寄席随筆』）。今から八十年前の速記

で、漢字や仮名遣いなども旧式である。「先刻宅（さっきうち）の御隠居がお宅へ来て、いろ〳〵御手数を掛けた上何も御願いせずに帰られました相で。いづれ何ぞ御願いには出ますけれども、これは今日の御邪魔料として、洵（まこと）に軽少で厶（ござ）りますけど、、、」と口上を言う。「ございます」に漢字を当てているのは、この例だけである。

劇中劇の例で参考程度に留めておくべきかもしれないが、噺『蛸芝居』から一例を挙げる（『米朝全集』第五巻）。芝居好きの商家に出入りしている魚屋の魚喜、掛け声に乗せられて「やっとまかせのな。えー、旦那様、今日はなんぞ御用はございませぬか」。芝居好きという設定になっているものの、「御用はございませぬか」とはまた時代がかった言い草である。

⑶と同じ「ゴザリマス」項の語釈で、船場言葉と並行して「ゴザリマス」→「ゴザイマス」→「ゴザリンス」という変化を廓言葉という注意書きと共に示しているのは注目に値する。「ございます」より丁寧度が下がるが、「ありんす」というのも廓言葉である。噺『千早振る』で、新町廓で一番の売れっ子という千早太夫が相撲取りの竜田川に言い寄られたところを「相撲取りは嫌でありんす」と袖にしたことになっている（桂文我師『初代桂文治ばなし』[*1]）。「ありんす」は吉原言葉という指摘も同書中であるが、『大阪ことば事典』では「ございます」より一段低い丁寧度ではあるが「ありんす」を挙げているのである。廓言葉というのは、各地から集めた娼妓を客の応対に当たらせるため、故地の訛りを消すように特別に工夫されたという側面がある。従って、新町と吉原という東西両極で同じような言葉遣いになったという可能性もあり得るのである。

もう一例も廓噺からである。『鼾茶屋』という珍しい噺で、田舎から出てきたばっかりの雛鶴という娼妓が、廓言葉にも慣れていない様子で「、、、というのならば、お馴染みの女郎衆もございまっしゃろに、わしらのような者を、はあまあ、呼んでいただきましてありがたいこってございまする」とある（『米朝全集』第一巻）。「ございます」の連用形で「ございまっしゃろに」に加えて、次で論じる「ございまする」という言い方まで登場している。

「ございます」よりも丁寧で古風なのが「ございまする」である。「ござる」の連用形「ござり」に続く助動詞が「まする」となっている分だけ古風である。上方落語随一の長編である『地獄八景亡者戯』で、閻魔大王の「亡者、召し連れましたか」という下問に対して赤鬼が「お目の前に控えさせてございまする」と返答している。畏まった物言いである（『米朝全集』第四巻）。芝居噺『本能寺』は、本能寺の変を『三日太平記』という狂言から丸々一幕を移したものである（『米朝全集』第七巻）。上方の芝居噺というのは、一幕を丸々一人で演じるという範疇を指すものであった。単に芝居がかった演出でツケが入る、というような部類は芝居噺とは分類されなかったのである。それはさておき、この噺幕開きで諸氏が居並ぶ中、役名の小田春永（史実の織田信長）が「北陸道へはかねてより柴田勝家を遣わし、まった中国筋へは真柴筑前守久吉を遣わしあれど、今に落ちざる毛利の三家、加勢の人数、評議いたしてよかろうぞ」、諸氏が答えて「かしこまってございまする」。文字通り芝居がかった場面であるので、言葉遣いも至って古風である。

「ございます」

五音節五拍の「ございます」が四音節五拍に変化したのが「ございます」である。「り」の子音が脱落したことによって二重母音が生じて音節数が減った。「ございます」は時代がかった物

言いであるのに対して、「ございます」は形式張った場面で頻出する丁寧表現である。噺『猫の忠信』は、『義経千本桜』の狐忠信を趣向取りして、三味線の皮に張られた猫の子が親を慕うて三味線を追い求めるという筋書きになっている（『米朝全集』第六巻）。吉野家常吉に化けた猫が正体を現して「頃は人皇百六代、正親町天皇の御宇、山城大和の二箇国に、、、」と語り出す独白は、「来序」というハメモノ（効果音、お囃子）に乗って緊張感が高まる。この独白は「あれあれあれ、壁に架かりしあの三味の、表革は父の革、裏革は母の革、わたくしは、あの三味線の子でございます」と結ばれる。芝居がかった場面で、堅苦しい言葉遣いである。また噺『欠伸の指南』では、欠伸の師匠が「はい。あのあくびとなんら変わりはないのでございますがな、（中略）もっと奥行きの深いあくびがございます」と丁寧な指南ぶりである（『米朝全集』第一巻）。女性の登場人物としては、噺『あん七』で田中氏の妻女があん七に字を教えるのに「こう横に一の字を書いて、次に上からこう引っ張ってきたら十でございますな」という例がある（『米朝全集』第一巻）。

否定形「ございまへん」は、例が少ない。噺『厄払い』で、年越しに厄を払うという旧弊の仕来りが題材になっている（『米朝全集』第七巻）。一通り厄払いの行事が終わったところ、夜半に雨が降ってきた。「年越しの晩に雨が降るとはどういうことやろ」と訝る当主に、番頭は「旦さん、これはめでたいことに違いございまへん」と答える。

「ごわす、ごあす」

丁寧語を形成する助動詞に「ごわす」がある。質朴にして男性的な語感を有する。女性の使用例は見い出せない。『大阪ことば事典』274）に次のような説明がある。

> (4) ございます。ゴザリマス→ゴザイマス→ゴザンス→ゴアンス→ゴアスと転訛したもの。（中略）大阪弁ではオマスがその代表的な言葉のようにいわれているが、もとは船場あたりではオマスは使わず、すべて、ゴワス、ていねいに言って、ゴザリマスであった。

中略の部分では、鹿児島方言「ごわす」との類似を論じているが、船場言葉の「ごわす」は上述説明のような変化の結果である。ここでは「ごわす」という途中語形は見られず、「ござんす」から「ごあす」となっているが、「ごわす」が「ごあす」の後で生じた形であるのか、検証を要するであろう。否定形は「ごわへん、ごあへん」となる。南陵師（2019：175）では「ごわせんか」という見出しで掲げられている。対応する島之内言葉は「おまへんか」となっている。そして「船場のごわせん言葉は、私あたりが最後の経験者でしょう」という述懐がある。

船場の大店から題材に採ったような噺、『千両蜜柑』では蜜柑一粒を巡って虚々実々の駆け引きがある（『米朝全集』第四巻）。夏の盛りに蜜柑食べたさに寝込んだという若旦那、頼まれた番頭が天満の蜜柑問屋で一粒を探し当てる。蔵に囲うた蜜柑を調べる間、売る方は「いいええな、もう私らこうやって家ん中に、いすわって、いいえ今時分、我々暇でごわすけどな、、、」と世間話をしている。一粒だけ、もぎたてのような上物が見つかったところで、番頭は二分（数万円相当）を差し出したが、売り手は「時期外れのこの蜜柑は二分や一両でようお売りしまへんのやが」「ごもっともでごわす。うっかりしとりました」と駆け引きになる。双方が船場言葉らしい「ごわす」で通している。この番頭は、蜜柑一粒で千両という値段を提示されて、「私さ

え、磔になったら済むことでごわす」と引き下がる。

また噺『立ち切れ線香』で、番頭がお茶屋に通い詰める若旦那を諭す場面がある（『米朝全集』第五巻）。「仮にも船場の御大家の若旦那ともあろうお方が、目上ばっかりお集まりの席に挨拶もなしに飛び込んで、立ちはだかってものを言うとは何事でごわす（中略）若旦那、これはなんやと思し召す。ご当家で一番大事な蔵の鍵でごわっせ」と諭す。使用人ではあるが、実権を握る番頭としての強い口調である。「何事でごわす」というのは、丁寧でありながら威圧的である。「ごわっせ」という形は珍しく、また決めつけるような調子でもある。

噺『崇徳院』では手っ伝いの熊五郎が恋煩いの若旦那から事情を聞き出して、親旦那に「このお方をお嫁におもらいあそばしたら、ご病気全快間違いなしでごわす」と報告する（『米朝全集』第四巻）。親旦那に対して話しているという事情もあるであろうが、「おもらいあそばしたら」という尊敬語表現にしても随分と丁寧である。また噺『高津の富』では、富籤が当たったら半分は上げるという泊まり客の申し出に当主が「それを私に、でごわすかいなあ……こあらまあぎょうさんに、ありがとうさんでおます」と礼を述べている（『米朝全集』第三巻）。「ごわす」は「ございます」ほどの丁寧度には及ばないものの、船場言葉であるという側面が窺える。しかし噺で見られる実例は「ございます」より遙かに少ないのである。

次は『上方らくご舞台裏』という著書から、先代（三代目）春團治師の話しぶりより例を引く。『鋳掛け屋』という噺で、長屋の小倅連中が鋳掛け屋を取り囲んで商売の邪魔をする。そのうち一人が、鋳掛け屋に「細君ごわすか」という質問をするという。年頃なら、五つ六つから精々が十歳ぐらいまでの子に「細君ごわすか」という質問をさせるのも、些か漫画的である。

否定形「ごあへん」の例を挙げる。先代米團治師の筆による噺『弱法師』台本が『寄席随筆』に収録されている。元は『菜刀息子』と呼ばれていた噺を、師が能や芝居『摂州合邦辻』の趣向を取って『弱法師』と変更したのであった。そこでは、裁ち包丁を誂えるようにと親から命ぜられたのを菜刀を持ち帰ったために「出て行け」と言われたのを真に受けて出奔した俊三という息子が描かれる。俊三を探すために、手っ伝いの熊五郎が呼ばれる。この辺りは、『崇徳院』と全く同じような運びである。「ここを廻るように」と渡された先を一通り巡って帰って来た熊五郎は「でこれには書いてごあへなんだけど、もしやと思いましてな、お梅どんの嫁入り先にも寄ってみまして、他の事に恰好づけてそれとなしに様子を見ましたけどそんな気配はごあへんでした」と報告する。過去の否定形が「ごあへんでした、ごあへなんだ」と二形ある。後者が古い形であろうが、いずれも貴重な例である。行く方知れずのまま一年が経って、一周忌法要が開かれる。「寒い最中に夜徹し駆けずり回ってもらいましたなァ。今でもあの時の事を想い出すと、なんや息が詰るような気がしますヮ」と、これは俊三の母親らしい。熊五郎は「左様でごあひょうともいナ」と応じる。「ごあひょう」という形も珍しい。ここでの熊五郎は、『崇徳院』におけるような剛毅な気質ではなく、気が弱い俊三に合わせたかのように繊細な人物として描かれている。

「やす」

これは標準的な日本語との対応を措定するのが難しい。例えば「おいでやす」は「いらっしゃい」であるが、元になっている語彙項目が全く対応していない。「おいでやす」の本動詞は「お出でになる」で、丁寧語としての助動詞「やす」が付け加えられた形であろう。対して「いらっ

しゃい」は「来る」の言い換え「いらっしゃる」という本動詞の連用形であろう。『大阪ことば事典』の例を引用する。傍点は省略する。

(5) ごめんやす・おいでやす・おやすみやすのヤス。遊ばせに当る。否定形はヤサヘンで婦人用語であるが「誰もおいやさしまへん（どなたもいらっしゃいません）」などという女性はすくなくなった。
おいでやすはいらっしゃいである。お羽織おぬぎやす、お風呂ィおはいりやすなどは、花柳界でよく使われる。その他、そんなことせんときやす（そんなことはしないでおきなさい）・はよおしやっしゃ（早くしなさいよ）・ちょっともおいでやさしまへん（少しもおいでになりません）・御寮人さんがおかいりやしたら、どうぞよろしゅう申しといとくれやす・あんたはんも、ちっとお遊びにお越しやしとくれやす。さらに、さいでやすかいなとなると、だいぶん品がわるくなる。

このように実に多様な用例が挙げられており、標準的な日本語への訳も行き届いている。婦人用語というのは、否定形の「ヤサヘン」のみを指すのであろう。いかにも船場言葉らしく響くが、その分古風である。花柳界での用例も豊富であるが、これら文例は男性が発したものか女性が発したものか、自ずから明らかである場合が多い。最後の「さいでやすかいな」のみ男性例で、その他は全て女性の発話であろう。噺『崇徳院』では、恋煩いの若旦那から事情を聞き出した熊五郎が、「ご参詣済ませて、絵馬堂の茶店で一服したんでやすと」と報告する（『米朝全集』第三巻）。また、すぐ後の場面でも旦那の「それも言うなら、水も滴（た）れるようなきれいなお方と違うか」という指摘に、「あ、それでやすわ」と応じている。「やす」は、話し手や場面に応じて、語感を変えるようである。但し南陵師（2019：175）の指摘にあるように、元来「やす」というのは島之内言葉であって、船場で用いられることは憚られた。

また『地獄八景亡者戯』では、三途川畔にある茶店で、事情を探ろうと立ち寄った一八を迎えて「はい、どうぞどうぞ、まあお掛けやす」と迎える場面がある（『米朝全集』第四巻）。店番をしていたのは若い娘で、それらしい口調で語られる。相手に動作を促す意図がある。また別の場面で、渡し船で向こう岸に渡った亡者の一人が「はあ、聞いてます、六道の辻。ここがそうでやすか」と尋ねる。これは事実の叙述で、疑問形になっている。

噺『骨釣り』では、船遊びに出かけた若旦那に幇間の繁八が「なんでやすかいな、釣りをするのに芸妓や舞妓乗せて……あんた、そんなことして何がおもろい」と問うている（同第三巻）。「なんでやすかいな」は一種の間投詞的挿入句になっている。贔屓にして貰う若旦那を「あんた」と呼んでいる点も面白い。

噺『浮世床』中で、吉松が居眠り中に見た夢が面白い（『米朝全集』第一巻）。雨宿りして入った家に、三十に手が届くか届かんかという年増が居た。二人して炬燵に足を入れて、足が触れたところ「ああ、すんまへん、足が当たったさかいというて遠慮しはらいでもよろしゅうございますがな。冷たい足をしておいやすこと」という丁寧な言葉遣いである。「やす」の尊敬語形でも「おいやす」という例は他になく、貴重である。

京言葉の例を挙げる。噺『京の茶漬け』で、留守番をしていた内儀が「あの京極のほうへでもお行きやしたら、結構なお店がぎょうさんにおすねんけど」と大坂商人に応対する（同第二

巻)。「お行きやしたら」というのが京言葉らしく聞こえる。

この「やす」が接続表現「さかい」に続くと「やっさかい」というように音声・音韻変化が生じる。噺『一文笛』で、掏摸の秀が街で一人に声を掛ける(『米朝全集』第一巻)。「立ち話もなんでやっさかい、ちょっとそこの茶店までお付き合い願えまへんやろか」という具合である。掏摸というような稼業、船場で生まれ育った堅気の衆が勤める職業とも考えられない故に、「やす」という言葉遣いが似つかわしいとも思われる。

もう一例、活用形で「やっしゃ」を挙げる。「やす」に終助詞「や」が後続したのであるが、音声・音韻変化によって「やっしゃ」となった。発話行為としては「しとくれやす」と同じように、相手に行為を促したり頼んだりする状況である。「しとくれやす」は統語分析すると「し(動詞「する」の連用形)+と(助動詞「た」の過去形)+くれ(動詞「くれる」の連用形)+やす」という複雑な陳述形である。仮にこれが「しとくれやっしゃ」という語形であるとすると、「やっしゃ」は「やす+や」と終助詞の「や」が加わって音声・音韻変化が生じたという複雑な分析が必要になるであろう。「やっしゃ」では「やす+や」と非常に簡略化されている。噺『祝の壺』で、お茶屋を開いた姐貴のこのやんに開店祝いとして水壺を届けた折り、このやんが「まあすんまへん。手洗うとおくれやっしゃ」と喜六清八に声を掛ける(『米朝全集』第一巻)。

「だす」

『大阪ことば事典』406頁の説明に、次のようにある。音高を示す傍点は省略した。

(6) です。ソォダス・ソォダンナ・ソォダッシャロ等と使用する。また、エライコッタッセ(大変なことですよ)の場合にはタスとなる。(中略)
一体このダスは大阪弁の代表的なものとなっているが実は多少品の落ちる言葉であって、大阪でも上流の家庭では決してダスは使わず、ソォデス(サイデス)・ソォデンナ(サイデンナ)、、、(以下略)。さらにていねいにいうと、すべてゴザリマスであった。

「ヤス」と同様に、豊富な実例で説得力がある。船場で生まれて育った話者でないと体感できない語用論的区別が貴重である。「です」は現代の標準的日本語と共通であるが、実は船場言葉でも基準となるべき丁寧語の助動詞なのである。「エライコッタッセ」においては、名詞「こと」に後続する「だす」の有声子音が同化して無声化したと考えられる。早口でなければ「えらいことだっせ」と原形を保っているであろう。

ここで指摘されるような「品が落ちる」という特性に反するような、女性による使用例を挙げておく。『七度狐』で尼寺の庵主さんが喜六と清八の二人連れに留守番を頼む折り、「いやいや、この寺もこうやってますとさびしいようでございますが、宵の口は静かだすけどな、夜が更けますとまた賑やかになりますでなあ」と持ちかける(筑摩書房版米朝全集第二集)。尼寺の庵主さんともなれば、それ相応の言葉遣いが求められるであろうが、ここは口が滑ったものであろうか。

上で指摘された「こったっせ」の実例は、『地獄八景亡者戯』で見られる(『米朝全集』第四巻)。三途川畔の茶店で、若い娘らしい店番[*2]と幇間の一八が会話をしているが、店番が「まあ、三途川の婆さんやなんて、あんた、えらい古いこと知ってはりますなあ。そんなものはもうよっ

ぽど昔のこってっせ」。これは、「ことでっせ」が音声・音韻変化によって「こってっせ」となったものである。全体の長さは五拍で変わらないが、「ことでっせ」の四音節が「こってっせ」では三音節になっている。なお、ここでの会話は文末の叙述動詞が多様で、分析には好材料である。少し引用してみる。

(7) 一「いえいえ、あのう、ちょっとお尋ねしたいことがあって」
茶「なんでおまっしゃろ」
一「あのう、これが三途の川という川ですか」
茶「はあ、これがかの有名な三途の川でございます」
一「へえー、私もな、娑婆で地獄極楽の絵を見たことがおまんねん。それで見るとなんや陰気な、怖い、恐ろしげな川やけど、なかなかこれ、きれいな川でんな」

一八「ですか、おまんねん、でんな」、店番の娘は「おまっしゃろ、ございます」という文末の言い切り形である。このうち「おまんねん、おまっしゃろ」は本動詞「おます」の活用形、「でんな」は「だす」の変種である「です」の活用形である。「だす」は頻用される故に、変種も多様である。「です」も変種の一形であるが、現代の標準的日本語と同形である。ところが、「でんな」と活用されると標準語的響きとは異なってくる。『地獄八景亡者戯』は公害問題や、三途川の婆さんが失業保険を受けるなど現代的話題も織り込むので、演者としては文末によって古風に聞こえるか、現代的な話題と齟齬がないかなど意識せねばならないであろう。

「だす」は頻用される故に、多様な音声・音韻的変化を遂げる。終助詞「ねん」が続く場合は「だんねん」というようになる。噺『骨釣り』では「今日の魚釣りにはちょっと趣向があるねん」と言う若旦那に対して幇間の繁八が「どんな趣向だんね」と問い返す（『米朝全集』第三巻）。本来は「だんねん」という形であるが、最後の撥音が脱落して「だんね」となった。

京言葉では「だす」が「どす」になる。噺『はてなの茶碗』では、清水の滝で手に入れた茶碗を茶道具屋の金兵衛さん店に持ち込んだ油屋に応対して、番頭が「うむ……この茶碗どすか。これ……お間違いおへんな。……えらい、せっかくどしたけど、手前どもでは、ちょっと目ェが届きかねますので、どうぞ、よそさんへご持参を」と断る（『米朝全集』第六巻）。「お間違いおへんな」というのも京言葉、「手前ども」は謙譲語である。油屋は油を売り歩く普段の恰好から身形を変えて、道具屋の手代とみられるように注意を払っている。番頭も、それ相応の言葉遣いで対応している。後に鑑定した茶金さんも「ああ、茶碗どすかいな……拝見をいたします」と番頭と同じように京言葉である。土地柄か、島之内言葉「だす」よりも京言葉「どす」は丁寧に聞こえる。

噺『京の茶漬け』は京言葉が多く用いられている。留守番をしていた内儀が、「まあ、鈍なこっとしてなあ、ちょっと今日朝早うから用足しに出かけて留守にしとりますのんどすけど」と応対する（同第二巻）。「こっとしてなあ」は「ことどしてなあ」が同化作用によって音声・音韻変化した結果である。

「おます、ます」

ここまででも何度か俎上に上がってきた「おます」を、『大阪ことば事典』139-140頁の説明

から検証する。傍点は省略した。

(8) あります。おありますの略ともいうが、御座(おま)す（おまします）であろう。おましどころ（御座所。貴人の居所）という語もある。（以下、用例は省略する）
一般町人の使用するこれに相当の言葉はデヤスであったが、次第にこのデヤスを圧倒して今ではオマスが大阪を代表する言葉として知られている。しかし、実は船場あたりでは、明治時代にはこのオマスはほとんど用いず、ゴワス、ゴザリマスが常用語であった。（以下、略）

この記述と同書が編集された年代を照らし合わせると、明治維新から太平洋戦争終結までの間に船場周辺で用いられる丁寧表現が「ございます、ごわす」から「おます」に取って代わられた状況が想定される。丁寧度が「ございます、ごわす」とほぼ同等であると考えられる「ございます」は、現在でも頻用される状況に変化はなかったと考えられる。上掲(7)の場面でも、「おまんねん、おまっしゃろ」という形で見られた。

助動詞「ます」は現代の標準的な日本語と同形である。噺『質屋蔵』で、質屋の当主が繻子の帯を題材に番頭に長話をする（『米朝全集』第六巻）。長屋の女房が、出入りの呉服屋から繻子の帯を元値の六円で売ると持ちかけられて「ほなうちの人に相談しときまっさ」と引き取る。元の形は「ます＋わ」で音声・音韻変化によって「まっさ」という形になったものであろう。

この「おます」を京言葉にすると「おす」となる。噺『胴乱の幸助』、後半は幸助はんが京に乗り込む（『米朝全集』第五巻）。天満の八軒屋から船で伏見に上り、道を尋ねる。柳馬場押小路は、と訊くと「へえ、おすえ。柳馬場押小路、おすおす」。重ねて「虎石町の西側ちゅうとこあるかいな」と尋ねると「へえ、虎石町の西側、おす。東側もおすえ」という返事。「おすえ」の「え」にしても、京言葉らしい響きである。

敬意表現の補助動詞

「なはる、なさる、やはる、はる」

相手の動作に対して直接、動詞に接辞する助動詞の形は多様であり、語源を辿る必要もある。『大阪ことば事典』では見出し語「ハル」の中で「ナサル→ナハル→ハル」という変化が提示されている。ここでは、「なはる、はる」両形を扱うこととする。「なさる」と「なはる」は通用であるという例も示す。

まずは「なさる」という形の例を噺『愛宕山』から引用する（『米朝全集』第一巻）。いつもの座敷遊びに飽きて愛宕山にお詣りしようと野駆けに繰り出した一行、弁当を広げるが青いものがほしいというので茶店で尋ねる。畑に植えてある菜に目を付けて幇間の繁八が「さーっと湯がいて、ええ加減につくってもってきて」と所望したところ、茶店の婆さんは「あれ、ほんまにあんた食べなさるか」と何度も念を押す。煙草の葉を自家栽培していたのである。

続く場面では、茶店から崖の下に設えた的に向けて土器を投げて遊ぶということになる。そこでお婆さんは「ここでみなさん放ってあそびなはる」と、今度は「なはる」になっている。この両例からも、「なさる」と「なはる」は通用であったと言える。京阪方言の特徴で、サ行が

ハ行に転呼する傾向が見られる。「なさる」が元で、「なはる」と転呼したものである。卑尊度も同程度であると言える。

次に、「はる」という形で他の本動詞に連なる例を挙げる。噺『冬の遊び』で堂島の米相場を張る直(じき)が、太夫道中の当日に新町の吉田屋に出かける（『米朝全集』第七巻）。太夫道中とは、廓で最高位の娼妓が意匠を凝らして廓を練り歩く一大行事である。その道中について、金元である堂島に新町から知らしておかねばならなかったものを怠ったため、直はそれを咎めようと乗り込んできたのである。「梅檀太夫を呼んでんか」と注文を付ける。「何を言うたはりまんのやいな」と返される。音声・音韻変化は「言うてはる」が「はる」に引っ張られて「言うたはる」となる。この方が音声的に自然である。

『関西弁事典』では、ナハルからハルが派生したとし、イ段接続すると見ヤハル・しヤハルとなるとする。つまり、ハル・ヤハル→アル・ヤアル→ル・ヤルという変化過程を仮定しているのである。「しやはる」の系列である。噺『貧乏花見』で、長屋一統が花見に出かけようというので、精一杯のおめかしをしてくる（『米朝全集』第六巻）。八卦見の先生が「草紙」と称して、「長屋の子供が手習いをした草紙の真っ黒になったやつを糊で貼り合わした」と説明すると、「紙の着物、着てきやはったで、先生」。「やはる」という形は、比較的珍しいと言える。先代米團治師の筆になる台本という形で『らくだ』が収録されている（『寄席随筆』）。そこでは紙屑屋は、「そんなら、らくだはんは死にやはりましたんか」「まアそうおっしゃるよってに言うのやおまへんけど、実のところ、死にやはったら世間の人は皆喜びますやろ」「らくだはんは、長屋に住んでいやはっても、付き合いという事は、しやはった事おまへん。行たかて滅多に香奠なんて出しゃしまへんワ」と古風な物言いである。これらはいずれも七十年後の現代では、「死にはりましたんか、住んでいはっても、付き合いはしはったことおまへん」というように、「いはる」と置き換えざるをえないような古風さである。

聞き手に対する敬意表明ではなく、第三者目当ての尊敬語例を挙げる。噺『子ほめ』で、喜六に新生児の褒め方を指南していた男が「額の広いところは、亡くなったおじいさんに似て、長命の相がおあんなさる」（『米朝全集』第三巻）と教える。生まれたばかりの赤ちゃんについて、両親を前にして述べている。両親に対しての敬意表現である。「おありなさる」の動詞「あり」で二音節目が撥音化している。

命令形は「なはれ」で、『禍は下』という噺から例を引く（『米朝全集』第七巻）。旦さんが夜遅く、丁稚の定吉を供に連れて「夜網を打ちに行く」と出かける。定吉が道中でごちゃごちゃ喋るので旦さんは「黙って歩きなはれ」と窘める。丁稚相手であるが、丁寧な物言いである。

否定型の例を見てみる。噺『瘤弁慶』では大津の宿で、風呂と飯を一緒にしたいと無理な注文を付けた喜六清八に対して番頭が「うだうだ言いなはんな」と窘める（同第三巻）。「なはる」の禁止命令形が「なはんな」である。終助詞「な」に禁止命令の機能がある。否定形は他では、噺『猫の忠信』に吉野家の常吉女房おとわはんの例がある（『米朝全集』第六巻）。駿河屋の次郎が常吉と稽古屋のお師匠はんが親密にしているのを告げ口に行って、当の常吉と遭遇する。実は稽古屋にいる常吉は猫が化けているのであるが、駿河屋は現場を検証するためにおとわはんを同道する。その途上で、おとわはんは駿河屋に「さ、早よ逃げなはらんかいな。わてこう目ェ押さえといたげるさかいな、今の間に早よ逃げなはれ」と促す。終助詞の「かい」が介在するので「なはらんかいな」という形になる。

「あそばす」

丁寧語としてではなく、聞き手または第三者の行動に敬意を示す動詞が「あそばす」である。「なさる、なはる」に比べても、遙かに上品な響きがする。その分、使用頻度は少ない。特別な状況においてのみ見られる。

無筆の七兵衛が、自分の名前に付く「七」の字を教わろうと田中氏宅を訪れる。『あん七』という噺である（『米朝全集』第一巻）。田中氏は不在で、留守居の妻女に字を教わる。「七」字の書き方として、「十」字の二画目で尻を曲げたら「七」になるというので、「ちょっとやってご覧あそばせ」と火鉢の灰上に火箸で書くように促す。二画目を曲げる段で「火箸のお尻（いど）をちょいと曲げて」と言うや否や、あん七は本物の火箸を曲げてしまう。その場面で妻女は「まあ、ほんまにお曲げあそばした」と驚く。この妻女は、あん七に金を借りているぐらいであるから、取り立てて裕福というほどでもない。そういう家庭にして「あそばせ」という言葉遣いなのである。

もう一例、『質屋蔵』から引用する（『米朝全集』第六巻）。三番蔵で化け物が出るという噂を聞き付けてきた当主が番頭に事情を尋ねる。番頭は「ま、どうせしょうもない奴がおもしろがって言いふらしてるのに違いおまへん。へい、どうぞご安心あそばして、こらもうお聞き流しのほどを」と言い繕う。大店の質屋という設定であるから、そこの番頭ともなれば立場相応の言葉遣いが必要なのであろう。

噺『崇徳院』では手っ伝いの熊五郎が恋煩いの若旦那から事情を聞き出す場面で、親旦那に「このお方をお嫁におもらいあそばしたら、ご病気全快間違いなしでごわす」と報告する（『米朝全集』第四巻）。ここで「ごわす」という船場言葉特有の丁寧表現と併せて、「おもらいあそばしたら」と助動詞「あそばす」の実例が挙がっている。手っ伝いではあるが、そこは船場に住まいして大店に出入りする身、言葉遣いは人後に落ちないものである。

次は丁稚が又聞きとして言う例で、噺『次の御用日』からである（『米朝全集』第五巻）。「堅気屋佐兵衛さんとこの嬢さんは別嬪さんや」という噂話の延長線上で、丁稚の常吉が「もうぼちぼちお年頃やけど、お嫁に行かはんのやろか、それともご養子さんをお迎えあそばすのやろか言うて」と取り沙汰する。「お嫁に行かはる」では助動詞「はる」、「ご養子さんをお迎えあそばす」では「あそばす」と、使い分けている。ところが、そのまま続けると「嬢やんお嫁に行きなはるか、ご養子をお迎えなはるか」と両方が「なはる」に統一されてしまっている。つまりは、「なさる、なはる」と「あそばす」は語用論的に同じような意味範疇であると言えそうである。

番頭が当主に対して言う、丁寧な命令形の例が『帯久』に見られる（『米朝全集』第二巻）。帯屋久七がお白洲に引き出されて、和泉屋与兵衛宅から持ち帰った百両について吟味されている折、番頭が「旦さん、思い出したと言うてお届けあそばせ。今、うちであんさん百両ぐらいどうちゅうことおまへんやないか」と注進する。「あそばせ」と命令形になっている。

「思し召す」

これもまた個別的で、他に例を見ないような類である。「思う、考える」の尊敬語で「思し召す」という丁重な言い方である（『米朝全集』第五巻）。「おぼす＋めす」という複合語形に由来するものであろう。ここでは後半の「めす」を補助動詞と見立てて論じる。噺『立ち切れ線香』

で、番頭が若旦那を諫める際に「仮にも船場の御大家の若旦那ともあろうお方が、目上ばっかりお集まりの席へご挨拶もなしに飛び込んで、立ちはだかってものを言うとは何事でごわす。座んなはれっ。……これはなんやと思し召す。ご当家で一番大事な蔵の鍵でごわっせ」。忠義の番頭は、ミナミの小糸という芸者に入れ揚げた若旦那を諫めるために必死の説得を試みる。しかしながら、奉公人という身分を弁えるならば決して尊敬語の使い分けは崩してはならない。そこで「なんと思し召す」というような問い方になる。船場言葉らしい、奥床しい中にも冷徹な意味合いを含んだ言葉遣いである。「ごわす」という言葉尻にも、自ずから船場言葉としての品位が窺われる。

「ござる」

元来は「ございます」の元になった「ござる」が、聞き手に対する敬意表明になる場合がある。噺『不動坊』で、不動坊火焔先生の同業軽田道斎先生、講釈師らしい堅苦しい物言いである（『米朝全集』第七巻）。雪が降る寒い晩、不動坊先生の幽霊として襦袢一枚で歩く中、一緒に歩くやもめ連中に「あんた方はまだ着物を着てござるからよろしい。私はこの長襦袢一枚……」と不平を言う。『くっしゃみ講釈』における後藤一山先生にしても、人物造形として講釈師は普段から武張った物言いをするように描かれている。講談師は寄席業界でも「先生」と呼ばれ、別格扱いであった。言葉遣いは侍言葉に準ずるとも言える。「ござる」の頻用は、武士が登場する噺で見られる。噺『矢橋船』で、浪人侍が船中で「率爾ながら」と声を掛けられて「拙者でござるか」と応じる（同書）。声を掛けた側は「いや何、我々は西国へんのさる藩の者でござるが、刀剣類に心を寄せまして、さまざまの名刀名品を拝見して目を養い、心を澄ますを何よりの喜びといたしておる者でござる」と説明している。会話の当事者双方が「ござる」で応酬している。

武家での言葉遣いが窺える一端として、『たけのこ』という小咄から引用する（『米朝全集』第五巻）。武家に奉公する可内（べくない）、屋敷内に隣家から筍が生えてきた。当主は、これ幸いと筍を一菜にしようと考えたが、一応は隣家に断っておこうとして次のように指図する。慌ただしうに隣家に走り込んで、「不埒でござる、不埒でござる、不埒分明、ふらふったいでござる」と叫（よ）ばわるように、と。「不埒分明」は「ふらふんみょう」という読みであって、「ふらふったい」は単なる語呂合わせでしかない。それを大仰そうに「不埒分明、ふらふったい」と大声で叫ばわせるのが話術上の工夫であろう。

また侍言葉としてではなく、敬意表現と見られる例が噺『蛸芝居』にある（『米朝全集』第五巻）。芝居好きの商家、朝が遅いので当主自らが三番叟を踏んで家内を起こしに掛かる。「いつまで寝てんねや。お前らが起きんよってに、こんなことせんならん。ええ、ご近所はみな、早うから起きてござる」。ここでは単なる叙述形式「です、ます」をより丁寧にしたのではなく、「起きる」という動作そのものに「ござる」という補助動詞を接辞しているのである。「早うから起きてはる」と言うよりも、古風な響きがする。

次もまた尊敬語の助動詞としての例である。噺『土橋萬歳』で、番頭が葬礼の見送りに立たねばならないという場面である（『米朝全集』第五巻）。「今日は旦さんが風邪で休んでござるによって、わしがちょっと代わりにお供に立たんならん」と、やや古風な物言いである。当主に対しての敬意で「休んでござる」という待遇表現である。

また同様に助動詞としての用法を、噺『亀佐』から挙げる（『米朝全集』第二巻）。亀佐とは江州伊吹山の畔にあった艾（もぐさ）の老舗である。場面はお説教で、当主の亀屋佐兵衛さんはグーグーと鼾を掻いて居眠りしてしまう。説教師は「講中のみなさん、何をしてござる。いびきがあってはじゃまになる」との仰せ、無理もない。鼾を放置している周囲のご門徒を責めているのではあるが、口調は「何をしてござる」と丁寧である。この場面は真宗でのお説教と思われるが、説教と演芸の関わりについては、関山師と釈師の著作に詳しい（参考文献を参照のこと）。

「とお」

女子語の依頼表現の助動詞「とお」の例を挙げてみる。これは、「～しとお」という形で「～してください」の意である。『大阪ことば事典』478-479頁では「しとおくれ（しておくれ）の約訛で、ちょっとそれ取っとォ（取って頂戴）などのように用いるやや下品な婦人用の命令語」という説明がある（音高の傍点は省略した）。「しておくれ」を「しとお」とまで縮約した分、丁寧度は下がる。噺『三枚起請』で、騙された源兵衛が相手の小輝に談判をしに行く。その座敷で、源兵衛はわざと素っ気ない態度を装う（『米朝全集』第四巻）。すると小輝が「スパスパスパスパ、煙草ばっかり吸うて……何がおもしろいねん。わてにも一服吸わしとお」と話しかける。この「吸わしとお」は、男女共用として「吸わしてえな」と言い換えることも出来る。語感としては「吸わしてえな」が直截的で行為要求の響きが強いのに対して、「吸わしとお」は柔らかく聞こえる。女子語たる所以であろう。

もう一例は噺『立ち切れ線香』からである（『米朝全集』第五巻）。若旦那が蔵住まい百日蟄居という戒めが開けて、ミナミ紀ノ庄に小糸を訪ねて駆けつけたものの、その日が小糸の三七日。「わしゃもうな、生涯女房と名の付くものは持たんで」「若旦那、よう言うてやってくれはりました、、、小糸、今の若旦那のお言葉聞いて、どうぞ迷わず成仏しとうや」。元を辿れば「どうぞ迷わず成仏しとおくなはれや」というように復元できるであろう。差し詰め、「しとおくなはれや」→「しとくなはれ」→「しとおんなはれ」→「しとおなはれ」→「しとうや」というような音声・音韻変化を経たものであろう。但し、途中段階は仮定である。

第三節　補助動詞の纏め

最終節として、尊敬語補助動詞について纏めておく。ここまで挙げた尊敬語補助動詞は以下の通りであった。

(9)　尊敬語補助動詞
　　ございます、ございます、ごわす、ごあす、なはる、なさる、やはる、はる、
　　あそばす、ござる、おます、ます、やす、だす、とお

補助動詞は、内容語ではなく機能語であって、なおかつこのように多様であるという点は特筆すべきである。補助動詞は、相手の動作に関しての「なはる、なさる、やはる、はる、あそばす」とそれ以外に大別される。それ以外とは、現代の標準的な日本語で「です、ます」というように言い方を丁寧にする部類であり、これらを仮に「陳述の補助動詞」と呼んでおく。前者

の部類では「あそばす」だけが他よりも一段敬度が高いが、「なはる」などは敬度は同程度であると考えられる。これらハル系の尊敬補助動詞は音型が多様である点が特徴的である。陳述の補助動詞は、卑尊度が段階的である。「ございます、ごわす」は「ございます、ごあす」に比べて丁寧である。「おます」は船場では使わないと考えられるなど、卑尊度は一段低い。「やす、だす」は更に敬度が下がる。

第一節で挙げた近畿方言の尊敬語補助動詞分類では、〈ナサル〉系が近畿地方全般で優勢という分析であった。その系統では、語形として「はる」と「やる」という形で具現する。両方を併用した「しやはる」という複合形もある。他の述部が続くと、「しとぉくなはらしまへんか」というような複雑な言い方にもなる。これを統語分析すれば、「し＋て＋おく＋なはら（「なはる」の仮定形）＋し（「する」の連用形）＋ます＋へん＋か」となる。実に複雑な統語構造である。強いて現代の標準的日本語に置き換えるとすれば、「しておいてくださいませんか」というようにするしかない。逐語訳のようなものである。「しとおくなはらしまへんか」にしても「しておいてくださいませんか」にしても、日常生活における使用例としては現実的ではないような古風な言い様である。

このように上方落語を題材とした待遇表現の語用論的分析は単独でも有用であると考えるが、江戸落語と比較すれば更に興味深い知見が得られるであろう。江戸落語に於いては尊敬語補助動詞は、ほぼ「れる、られる」に限定されるように思われる。この比較対照は今後の課題としておく。

注

＊1　同書によると、『千早振る』は初代桂文治師が創作した噺であったという。

＊2　娘は後に「鬼の娘」と名乗る。

参考文献

浅田秀子（2001）『敬語で解く日本の平等・不平等』東京：講談社。

井上史雄（編、2017）『敬語は変わる　大規模調査からわかる百年の動き』東京：大修館。

井上史雄・遣水兼貴（2017）「『敬語の指針』に見る現代敬語の性格変化」 井上（2017）所収。

楳垣実（編，1962）『近畿方言の総合的研究』東京：三省堂。

小佐田定雄（2018）『上方らくごの舞台裏』東京：筑摩書房。

桂枝雀（1995，1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。

桂文我（2002）『続　復活珍品上方落語選集』大阪：燃焼社。

桂文我（2014）『伊勢参宮神賑』東京：青蛙房。

桂文我（2016）『初代桂文治ばなし』東京：青蛙房。

桂米朝（2002，2003）『上方落語　桂米朝コレクション』全八集。東京：筑摩書房。

桂米朝（編，2007）『四世桂米團治寄席随筆』東京：岩波書店。

桂米朝（2013，2014）『米朝落語全集』全八巻、増補改訂版。大阪：創元社。

角岡賢一（2017a）「上方落語に見られる軽蔑語の実例」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第26巻。pp.95-114。

角岡賢一（2017b）「上方落語に残るお茶屋文化」『京都産業学研究』第十五号。pp.125-142。

角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。pp.3-22。

角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他（編）所収。
金沢裕之（2000）『近代大阪語変遷の研究』大阪：和泉書院。
菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
旭堂南陵（2019）『事典にない大阪弁』増補改訂版。大阪：浪速社。
真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
釈撤宗（2010）『おてらくご　落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
釈徹宗（2017）『落語に花咲く仏教』東京：朝日新聞出版。
関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。
髙島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇Ｂ。
東大落語会（編、1994）『増補　落語事典』改訂版。東京：青蛙房。
竹田晃子（2017）「卑罵語と敬語の発達」井上（2017）所収。
前川佳子（2016）『船場大阪を語りつぐ』大阪：和泉書院。
前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本稿店。
牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
米倉よう子、山本修、浅井良策（編、2020）『ことばから心へ　認知の深淵』東京：開拓社。